

巻頭言 日本アイソトープ協会の活動に参加してみませんか

藤浪 眞紀

Fujinami Masanori

(千葉大学大学院工学研究院)



RI・放射線が関与する科学・技術領域が多岐にわたることは皆さんご存じのとおりである。私は学生時代はメスバウア共鳴吸収を専門とし、その後企業及び大学で陽電子消滅及び放射光による材料研究を行ってきた。放射線の選択、検出系の最適化、放射線と物質の相互作用を基礎とした結果の解析を通して、材料物性の発現因子を考察することで研究を成立させてきた。研究をする上で必要となる項目や要素技術は多様であり、各学問領域の動向を注視する必要がある。そのため、異なる研究領域間を結ぶ人的ネットワークを構築することを心がけてきた。

日本アイソトープ協会（以下、協会）の学術的活動への参加は、RI・放射線が関与する多彩な学術領域を学べる環境を与えてくれている。2018年から統合した理工・ライフサイエンス部会で部会長を担当しており、いくつかの活動をお伝えしたい。部会には専門委員会があり、今後発展していく分野の支援、放射線利用における問題の克服、分野横断的な活動の一層の促進等を目的としている。各委員が様々な立場・観点から議論し活動していくことで、目的達成のための多様な解決策を見出し、更に派生した活動が生まれている。2019年11月に陽電子放射断層撮影（PET）研究を軸とした協会シンポジウムを開催した。PET診断技術における放射性医薬品、放射線検出器、信号処理・画像解析技術、がん細胞挙動、核医学といった最先端技術の融合の歴史と進化を目の当たりにした。2021年11月には α 線放出核種標識薬剤を用いた核医学治療の現状と今後の可能性に関するシンポジウムを企画している。これらは縦軸である各研究の深化と異分野研究間の連携という横軸が融合して初めて成果が実となる研究の代表例である。競争と調和が大きな成果をもたらす。2019年には念願の協会奨励賞の設置が実現した。どの応募者にも「きらり」と光るものがある。RI・放射線利用分野における人材は豊富であり、将来は明るい。選考における悩みの種は、専門分野が非常に広範囲にわたることで、各分野でトップに立つ業績を異なる分野間で比較することは難しい。一方、その選考における議論は興味深く、選考委員は真剣に悩みつつもうれしそうである。

他にも数年前から *RADIOISOTOPES* 誌の編集委員を担当しているが、素粒子から医療そして環境問題、加速器・検出器等の放射線関連機器、放射線教育等掲載論文は多彩であり、毎回の編集委員会は私にとって勉強の場である。また、2019年度には「4版 放射線安全管理の実践」の編集委員長を務めた。ICRP勧告・法令に基づくRI・放射線管理規制を放射線取扱業務という現場にどのように適切に反映させるのか、安心・安全という法の魂をどう入れていくかを考える大変良い機会となった。

以上、私が協会活動の一部を微力ながら担当させていただいた事柄とその感想を述べた。多くの学会での活動は研究の専門性を深めていくには良い場であるが、協会の活動は分野横断的な事項を学ぶ機会や他分野の専門家と交流する機会に恵まれることに特徴がある。協会活動への参加は、異分野に対する知的好奇心が刺激され、自身の研究においても新たな側面や利用価値を見出すことができる。RI・放射線でお仕事をされている方は自身の研究活動や見識を広げる場として、協会活動に積極的に参加してみませんか。